

平成22年度幼稚園教育理解推進事業（中央協議会）

研究発表要旨

都道府県名 鳥取県
幼稚園名：職名 学校法人美哉幼稚園 教諭
氏名 池淵 誠司

(分科会名) A-2分科会	(協議主題) 食育 健康な心と体を育て、幼児が進んで食べようとする気持ちをもつためにはどのような環境の構成や教師のかかわりが必要か
発表題目	「地域性を活かした食への興味・関心の持ち方～知ることによって育つふるさと愛～」

1. 園の概要

鳥取県境港市の市街地に位置する。昭和4年設立。現在、教職員数；計11名。

園児数；年長児26名、年中児38名、年少児29名、2歳児11名、計104名。

2. 結論

いかなる幼稚園も現代という歴史社会の状況の中にある。したがって、今日の社会がはらむ問題状況は同時に幼稚園の問題状況にもなる。問題が受け止められた時、それは課題となる。その課題に、私どもは幼児教育の本質をもって応えることができると考えている。幼児教育は、生涯教育において大切であるというだけでなく、社会が逢着する諸問題に根本的なところからの視座を与え得るという意味で大切である。

それでは現代社会の問題の所在はどのように規定できるか。体験の断片性と言える（鬼頭秀一にならって「切り身」の語で象徴させてもよい）。それに対応して求められるのは、経験の全体性である（「生身」の語で象徴させてもよい）。全体性は関係性と換言してよい。経験とは直接的な体験以後に展開してくる活動や表現を含み、また体験以前の活動をも含むものである。

「食育」に絡めて言うと、その範囲は、実際に食べるという体験の以前・以後を含んだものである。この度の「協議主題」も、体験「以前」の充実が課せられている。幼児の意欲を引き出す環境設定や教師の言葉がけということに重点が置かれているからである。

敷衍して言うと、食だけで食をとらえないということ、食の以前以後をとらえるということは、食を健全にするためには一見食と関係ないようなところを大回りするということが必要ということである。大回りとは、狙った事柄を直接教師が与えたり指示したりするのではなく、「環境による教育」ということである。直接の指示により、「必然を必然として出会わせる」のは教科教育の方法であるが、幼児教育は「必然を偶然として出会わせる」のであり、そうであってこそ幼児の自発性が育まれるのである。

自発性や主体性を培うのが幼児教育の仕事である。では、主体性の成立基盤は何か。それは、主体の於いてある世界（文明、文化、風土、地球環境等の全体）である。主体に先立つものが主体性の基礎をなすのであるから、世界の広さや深さにどこまで自覚的になれるかが幼児教育のうつつである教師に課せられている。世界と主体の一体性に覚めている教師によって、経験の全体性が掬いだせるような豊かな活動が構想されるであろう。

水揚げ量全国7位の境港にすむ園児たちで、「切り身」が泳いでいると思っている子はいないが、どれほど「生身」を体験しているかは疑問である。実際ある調査では、境港の児童・生徒の自然体験の少なさや地域への無関心が、見てとれる。

上記の問題状況に応えようと試みられたものが「お魚探検隊」という体験的な学びである。以下、「お魚探検隊」というひとつの尖端が、その前後の連関を持ちながら展開する活動であるということの軌跡を報告する。

3. 研究目標

地域の特色である海・魚への関心を高め、地域性を活かした保育の形を作っていく。食育は活動の種類によって「食べる」「育てる」「作る」「知る」に分類されるが、その内の「知る」に重点を置き、魚市場での体験を核とすることで、体験を経た子どもの食への興味・関心の変化を探る。また、食への興味・関心に結びつく活動や教師の関わり、環境構成を広義的な意味合いで模索する。

4. 実践事例

「おさかな探検隊～魚はどこからやってくるの?～」




I) ねらい

- ・本物の魚を五感を使って見る。その後の活動での表現を期する
- ・地域にある漁港や市場を見学することで、働く人にどのような仕事や役割があるかを感知する。
- ・家庭でおいしく魚を食べるために、魚はどのような道のりを経て私たちの口に入るのかを知る。

II) 子どもの実態

- ・魚が泳ぐ姿を知っていると言うが、実際はテレビでしか見たことのない子どもが大半である。
- ・生きている魚より、切り身や刺身になった魚を連想してしまう子もいる。

III) 「おさかな探検隊に至るまでの活動」(○子どもの姿、★環境構成、☆教師の援助)

子どもの姿	環境構成・教師の援助
<p>○興味を持った子どもが魚を調べだす。</p> <p>○図鑑をもとに製作をはじめます。</p>  <p>○覚えた魚を口々に教師に伝える。(正解率は非常に低い)</p>	<p>★子どもの興味に沿った図鑑や本を自由に使えるようにしておく。</p> <p>☆絵本の読み聞かせと同じ感覚で教師が釣った魚を図鑑と照らし合わせて話していく。</p> <p>★作った作品を展示してもよい事を伝える。 (ガラスや窓に製作した作品を飾る子どもがあらわれた)</p> <p>☆給食に魚が出た際は「この魚何でしょう?クイズ」を出題する。</p> <p>☆魚にはよくみると皮や身、匂いに特徴があることを伝える。</p>
 <p>○魚の名前と形を一致させようとする。</p> <p>○覚えた魚の名前を楽しそうに言う。 (まだこの頃はイカ、タイなどが多い)</p>	 <p>★魚カードを遊びの中で使えるようにする。</p> <p>☆リズムに合わせて魚の名前をいうゲームを取り入れる。</p>

ポイント

- ・この時点ではクラス全体の絵画活動などは行わず、興味を持った子どもが好きなように遊びを展開できるようにした。
- ・「飾る」、「人にみてほしい」という何気ない子どもの意識と自主性を尊重し、「ここに、つくったのを

はりたい！」という場所に作品を飾れるようにした。展示することで、他の子どもも魚に興味を持ち出した。

IV) いざ！「おさかな探険隊」に出発！！

少しだけ魚に興味を持った子どもたちとお魚センター（水産物直売センター）に向かう。



漁港では漁師さんが魚を水揚げしている。
これが魚を「とるひと」



とった魚はトラックに積まれて、市場で売られる。
そしてその魚を魚屋さんが買って行く。



お店で魚のことを教えてくれるのは「うるひと」



お店で魚を「かい」、おいしい料理を「つくってくれる」のが
みんなのお家のひと。

「とるひと」、「うるひと」、「かうひと」、「つくるひと」がいてくれるからおいしい魚を食べることができる。活動のねらいを単に言葉で教えるのではない。子ども自身が「本物」を五感でしっかりと感じられる環境が漁港や市場の中にはあるのだ。少し遠回りをしながらも、教師と一緒にどんな役割があるかを確認していくことが活動の核である。

V) 実践を通しての子どもの変化

スーパーのような単なる消費地ではなく、コミュニケーションのある売り買いが行われる市場、魚の水揚げとその前提としての海、それらを目の当たりにした子どもたちに活動前と活動後に同じ質問をしてみた。

教師：「魚はどこからくるでしょう？」

活動前 → 「うみからにきまっとるがん！」（方言）



活動後 → 「うみにいるさかなをりょうしさんがとっていちばにくる！！」

この活動により子どもたちの中で知識と体験が結びつき、特別な経験へと変わっていくのがわかった。何より実際に「本物を見る」という活動はこの後、様々な遊びで「ある効果」を発揮していった。

VI) 実践事例を通しての遊びの変容

①体験を活かしての海作り



協同作:「さかいみなどのうみ」

○子どもの姿	★環境構成・☆教師の援助
<p>○「ねえ、いっしょにうみつくろうよ」と数人の子どもが実際に海を見たことで製作を始める。</p> <p>○最初は、近い距離にいるが、別の世界観で別々の製作をしている。</p> <p>○それぞれの作品が完成に近づくと「これをつなげたらもっとよくなるね！」</p> <p>○互いの作品の完成を楽しみにし、出来た作品をつなぎ合わせて協同した作品を完成させる。</p>	<p>★「さかいみなどのうみは、あおとみどりがまざってる！」という海での子どもたちの会話を活かせるように、絵の具の中に青と緑を準備して様子を見る。</p> <p>☆「つなげたらもっとよくなる」という子どものアイデアに共感することで、意欲的に製作が進められるようにする。</p> <p>★次なる展開を期して、展示する場所を示唆する。</p>

※ 完成した作品をよく見ると、海の色は青と緑の絵の具を混ぜて作られている。

②つながる粘土あそび



「よし！つながった！！！」



あっという間に粘土の水族館が完成

○子どもの姿	★環境構成・☆教師の援助
<p>○一人の子どもが楽しそうに粘土で自分なりに海の中を表現する。</p> <p>○「わかった！ヒレがあるとおよげるね！」</p> <p>○教師との楽しそうな雰囲気につられ、魚をつくる人数が増え、作品同士が机上でつながっていく。</p> <p>○以前作品を好きなように飾った経験をもとに、窓際に水族館を作り出す。</p>	<p>☆「魚はどうしてあんなに上手に泳げると思う？それがわかるともっと楽しい海になるよ！」子どもの興味を引く言葉掛けをする。</p> <p>★「こんなに楽しそうなのに机の上だけでつながるのはもったいないね」</p> <p>子どもが考えて自分たちで環境を構成するヒントを与える。</p>

※ 一人ではじまった遊びの楽しさが周りの子どもに伝わると、協同して作った作品になり、お客さんをお呼びするというプランが出て盛り上がっていた。

③止まらない協同製作



海を見た後の海作り。自然と仲間が集まり感じたままに色をぬる。時間をかけて少しずつ調和された色はまさに境港の海そのもの。



作った海に思い思いの魚を貼り付ける。リアリティーと、こんないきものがいても面白いという発想が融合して、出来上がった作品は・・・



一斉活動で描いた絵とは別の躍動感がある。

一斉での設定のある活動で子どもが作る作品は経験したことを上手く活かしたり、それぞれが感じたりしたことを形にする。

設定外で子どもが自由に進めるあそびは自然と仲間が集まり、協同性のある活動へと発展を遂げていった。

境港という風土に育まれた子どもたちが自ら進んで遊びができる環境は、まさに自主性と共同性を同時に育てるのである。

5. 考察

「地域資源」は活用しなければ無いものに等しい。山や海という特有の風土に恵まれた環境を上手く保育に活かすことで子どもたちの中に生まれるものがある。なぜなら境港の風土が子どもたちを育てているからである。子どもが興味・関心を示せるかどうかは教師の手腕にかかっている。

テレビや図鑑をみて得た知識が有意義なものになるのは、「本物」を見聞きすることによってではないだろうか。五感でしっかり感じることで体験の入力は大きく深くなり、表現の出力は多様化し豊かになっていく。それは今まで述べたように、子どもの姿に反映されている。子どもの自主性を活かし、その思いを具現化できる環境を子ども自身で作れるようにすることこそが教師の仕事である。

ただ、幼稚園の子どもが魚市場で魚を見学して何になる？小学生になってからでもよいはずだ！という意見も存在する。しかし、活動を進めていくうちに小学生ではなく、むしろ幼児期だからこそ意義深い活動になるのではないかという思いを強くもつようになった。



「なぜ市場見学を幼児期にするのか」

幼稚園児は一般的には、小学生のように「勉強」は出来ないし生活力もはるかに劣ると考えられている。しかし、「遊び」の中には勉強の基礎となるものがたくさんつまっている。幼稚園では子どもの学びが「遊び」の中に存在するのだ。特に自分の好きなことや興味・関心を持てる活動に出会えたときの感性や表現は、時に大人の感覚さえ凌駕していく。

また、幼児期は「生活に根をはる力」を育てる時期なので、この時期に地域や土地のものに親しむことで子どもの中で境港がふるさとになり、より強くふるさとの力が子どもの中に培われるのではないかと。

幼稚園児と小学生とで、ものを見聞きした時の吸収の仕方が違い、それは体験における言語の介在の度合いに関わって比較的世界を直観的に捉えるか分析的思惟で捉えるかによると思われるが、ここでは詳論できない。「直覚は原文であり、思惟は注釈である」(西田幾多郎全集 16-277)。

6. 食育としての成果

ある日の給食に魚が出た際に、子どもがこんなことを言った。「せんせい！きょうはぜったいなんのさかなかあてるからちょっとまって！」しだいに相談の輪がクラス中に広がり、子ども同士で意見を交換しあう。今までの経験と照らし合わせてフライの衣をとって魚の皮を観察したり、模様で見極めようとしたり、教師が何も言わなくても調べようとする姿が増えてきている。興味や関心の質が少しずつ



高まると、不思議なことに、観察眼も鋭くなっているようだ。

もはや「タイ」ではなく、マダイ・クロダイ・アマダイ・イシダイ。「イカ」ではなく、コウイカ・スルメイカ・シロイカ・アオリイカなど日に日に増える覚えた魚の名前には圧巻である。



ある子どもの保護者は子どもが持って帰って来た一枚の魚図鑑と一緒に眺め、子どもに誘われて初めて魚市場を訪れたという。子どもは自分が学んだことを親に伝え、今度は親子で一緒に楽しむ。また家庭でも、子どもが質問した魚を親が教えるということも増えているようだ。

子どもが魚市場見学をする時期に保護者にも魚市場を見学する機会を設けている。魚屋さんがていねいに説明をしてくれるなど、単に金銭のやりとりではなくコミュニケーションを大切にしてくれる。おとなも市場を楽しむことから始まるのだ。

こうして親子でも境港に根付いていく「ふるさと愛」が少しずつ増えてきている。いつの日か子どもたちが、子どもの頃に根付いた「ふるさとの力」でふるさとを支えていくことをこの研究の最終目標とする。

7. 課題

上の「考察」で言及した、「魚市場見学」をする時期をめぐって露呈したことは、幼児教育の社会的認知度の低さであると言ってよい。その一因は幼稚園関係者が、幼児教育を外に向けて語ってこなかったことにあるであろう。したがって課題となるのは、幼児教育の言語化であり、客観的な根拠・明証性(evidence)である。

他方、客観性の確保や成果の公表の重要性を認めただうえで、なお、客観的な証明の困難を言わざるを得ない。「ふるさと愛」の醸成にしても、その実現の時期が決められる事柄ではなく、原因と結果が一对一対応になりえないので証明不可能な類の事柄であり、達成度の評価が困難な活動であると言わざるを得ない。「何について論証が求められねばならないか、何について論証を求められてはならないかを、棄えていないということは、教育の無さである。」(アリストテレス『形而上学』1006a 以下) 幼児教育とはどこまでも、「後伸び」を期しながらも、その収穫がいつになるか分からない果実の種まきである。